『反戦平和の詩画人 四國五郎』 四國 光著（藤原書店）

2970 円

原爆憎み　描き続けた父

◇しこく・ひかる＝1956 年生まれ。四國五郎の長男。父に関する展覧会や講演を精力的に行っている。

――戦争を起こす人間に対して、本気で怒れ。

癇癪(かんしゃく)をおこす幼子に、父は真剣に諭した。父とは広島の画家四國五郎、息子は著者である光。光を支える姉の美絵。家族による合作といえる本書は、ヒロシマの戦後を真っ向から問い直す評伝だ。

四國五郎が亡くなって九年、その再評価が国内外で進む。四國といえば「母子像」。原爆そして戦争への怒りをテーマにしながら、描くのは悲惨の対極にある 温ぬく もりや奪われたものへの哀惜。『おこりじぞう』の挿絵が有名だ。海外の大学は四國作品を平和教材として活用する。

幼いころから卓越した絵の才能で周囲を驚かせた。20 歳で出征、３年余の苛烈なシベリア抑留も、 密ひそかに絵を描くことで正気を保った。帰国して最愛の弟直登(なおと)の被爆死を知り、決意する。「祈るだけでは平和は来ない」「死んだ人のために描こう」。GHQ の占領下から峠三吉らと絵画と詩で反戦を訴えた。バンクシーのように街角にゲリラ的に反戦の絵を掲げて弾圧に抗った。のちに広島の財産となる「市民が描いた原爆の絵」の活動では人々に説いた。描くことが難しければ、言葉を足そう。形式は問わない。伝えたい、その願いこそがすべての原点と信じた。

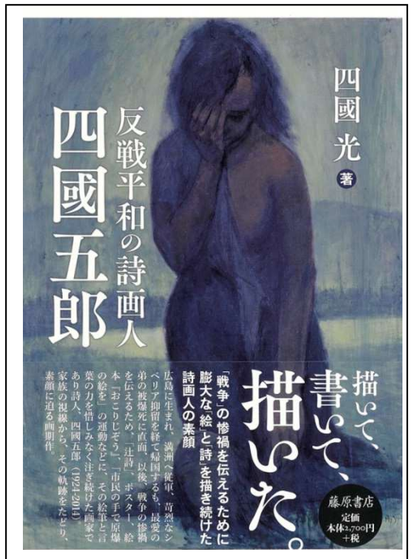
自らは被爆していないこと、絵の専門教育を受けていないことで中傷もされた。反論はせず、ただ描き続けた。思想に拘泥せず「手で思考」し続けた。自分の絵は平和のため。画廊には生涯一枚の絵も売らなかった。

晩年、認知の病を患う。光はこれまで伏せてきた 変貌する父の姿、家族の辛い介護や後悔まで余す所なく綴る。癒えかけた傷口に自ら刃を突きさすように。かくして四國五郎の足跡は本書に完全なかたちで刻まれた。父と子の営みに、無常を生きる人間の哀しみと強さを見る。

世界は再び戦争の時代を迎えた。Ｇ７サミットの嵐が吹き荒れた広島の地に、深く静かに記憶の錘(おもり)を下ろす一冊である。

堀川惠子（ノンフィクション作家）

2023/06/09 読売新聞書評



目次

はじめに――戦争への怒り
第 1 章　神童と呼ばれた少年
第 2 章 「戦争体験」
　――軍隊　ソ連軍との死闘
第 3 章 「戦争体験」
　――シベリア抑留
第 4 章 「戦争体験」
　――原爆　弟の被爆死
第 5 章　戦後広島での表現活動
　――「反戦平和」を描く決意
第 6 章 「表現」することの意味
第 7 章　ヒロシマを描く
第 8 章 「市民の手で原爆の絵を残そう」
第 9 章 「戦争の記憶」をつなぐ
第 10 章　素顔の父
第 11 章　晩年、そして死
終章　終わらぬ旅
あとがき
〈附〉「弟の日記」 四國五郎
　四國五郎の主な仕事
　（油彩・水彩作品以外）と関連作品
　四國五郎略年譜　（1924-2014）
主要人名索引

毎日新聞　2023年（令和5年）6月28日（水）夕刊　D夕刊

Topics 反戦平和の詩画人、四国五郎の軌跡

父との対話「再発見」の旅

長男光さん、6年かけ刊行

広島の地に根ざして反戦反核と平和をテーマに絵や詩を作り続けた四国五郎（1924～2014年）の軌跡に迫った『反戦平和の詩画人 四國五郎』（藤原書店）が発刊された。著者で長男の四国光さん(67)は、残された膨大な作品や書簡などの資料をひもといていった作業を「対話しながら父を『再発見』する旅でした」と振り返る。

居間の真ん中に据えられたイーゼル。部屋中に漂う油絵の具のにおい。光さんは物心付いた頃の自宅を記憶している。父は外出時は画材道具を持参し、常に何かを書いて、描きまくっていた。声を荒らげた覚えがない」ほど物静かな父は、外では反戦平和の闘士。光さんは進学と就職を機に広島を離れた。長く闘病した父をみとった後に、表現者である四国五郎としての顔を知ることになる。絵やポスター、詩、手紙、書籍などで埋め尽くされたアトリエを整理しながら、没後毎年のように各地で開かれる回顧展に関わるうち、父が戦後の人生をささげたものを理解していった。

辻詩の一枚＝四国光さん提供

右『反戦平和の詩画人 四國五郎』を著者の四国光さん＝大阪市北区で、宇城昇撮影

出征前の出来事を書いたメモには、ランドマークだった広島県産業奨励館（現在の原爆ドーム）を見納めに訪れたとあった。しかし、死ぬはずだった自分は戦場と抑留の歳月を生き延び、失われたのは広島の街。弟は若くして無残な死を強いられた。

このとき、自身の戦争体験と弟の被爆死が「一直線の因果関係で繋がった、という感覚ではなかったかと思う」と光さんは記す。こうした父への問いかけを著書の随所に挟む。「父は生き残った使命は何かを自問し、再び日本が誤った道を歩まないために『生命をささげてもよい』と覚悟を決めていました。それを記した文章を見つけ、私は凍りつきました。トラウマになってもおかしくない戦争の体験が、自分の行動に灯をともし続けるエネルギーになったのでしょう」

四国五郎は自身が体験した戦争の詳細な記録を残そうとした。収容所でひそかにつづった豆日記を靴に隠して持ち帰り、それを頼りに少年時代から戦場と抑留体験、帰国後の活動までを絵日記で構成した1000㌻超の『わが青春の記録』を自作した。没後に発見した資料には「シベリアの青春」と題した800㌻に及ぶ大作の構想を記していたが、発病により未完となった。「実現していれば、世界に類例のない一兵卒の壮大な戦争体験記ができるはずだった」と光さんは悔やむ。アトリエからは戦場体験を50編超につづった「戦争詩」と題した未発表作の草稿も見つかっている。

■　■

画家として紹介されることが多い四国五郎は、実際には「絵と詩の二刀流」（光さん）。「にんげんをかえせ」で有名な詩人の峠三吉は盟友と言える存在で、やはり詩人の栗原貞子、連作「原爆の図」で知られる画家の丸木位里・俊夫妻…。反戦文化運動の人脈は広い。同人誌の挿絵や表紙を描き、詩も自作した。

ただ、画家と詩人の2役をこなしたという意味にとどまらない。誰にでも分かるようにメッセージを伝えるためには、絵の中に文章を書き込む表現の手法をいとわなかった。その例としてページを割くのが、朝鮮戦争の前後、連合国軍総司令部（GHQ）による言論統制下の広島で展開した「辻詩」と呼ばれる運動だ。反戦詩を書いたポスターを四国五郎が作ると仲間が街頭に張り出し、警察が来ると剝がして別の場所へ向かう。逮捕覚悟のゲリラ的な行動で、廃棄と没収が運命づけられた作品は8枚しか現存していない。光さんは現代におけるバンクシーを引き合いに「アートを手段として活用する社会変革活動の先駆け」と捉える。

■　■

その発展形と考えるのが、被爆者自らの手で原爆の記録を後世に描き残そうとした運動だ。74年から広島のNHKが募集し、呼びかけ人として協力した四国五郎は「絵でうまく描けなければ文字で補ってください」と番組で説明した。わずか2カ月で1000枚が集まる大反響を呼ぶ。素人の表現方法は稚拙でも「これを伝えなければ死にきれない」という気迫が人の心を動かし、それまで「自分は被爆体験がない」と遠慮があった四国五郎も原爆の表現者として堂々と出ていく。その覚悟が、長く読み継がれる絵本『おこりじぞう』（金の星社、79年）につながった。

光さんは「自分の絵は芸術性に欠けるのではないか、という疑念はついて回ったと思う」と父の葛藤をおもんばかりながら、「表現物が生み出す社会変革の力を心の底から信じていたのでしょう」と言う。車を購入するや、「平和」を意味する世界の言葉を車体にペンキで書き付けたエピソードを「ひとりデモ」「走る辻詩」と紹介する。愚直なまでの反戦平和主義は生き様だった。中央の画壇や文壇には評価されなかったが、とある大学教授が「市民の中で、市民のために描いた画家」と呼んだのを「とてもありがたい」と喜ぶ。

自身の体調不良もあり構想から刊行まで6年を要したが、執筆に駆られた理由があった。「戦争が足音を立てて迫っているように思える今、一個人として活動した父の実践に、参考となるヒントがあるのではないでしょうか」【宇城昇】

60歳のときの四国五郎＝広島市の自宅アトリエで1984年